

## 書評

佐久高十著

## 近世農村の数的研究

—越前国宗門人別御改帳の分析綜合—

三 上 一 夫

このほど吉川弘文館より刊行された『近世農村の数的研究』は、福井工大教授佐久高十氏の著作によるものである。佐久教授は、多年にわたり越前国内の宗門人別御改帳をくまなく調査し、その結果を『越前国宗門人別御改帳』六冊（吉川弘文館刊）として刊行したが、今回はそれらの史料を基礎として近世農山漁村の社会経済的な動向を一書にまとめたものである。

本書では、一、近世越前農村の人口

二、村内人口の諸問題 三、家族の生活 四、農村社会 五、農村の経済生活 六、村と公課 七、農民の宗教生活 八、農村と医療の八章に区分し、それぞれ前記人別改帳の關係史料によって、種々の詳細な統計調査結果を検出し、農山漁民層の社会経済生活の実態や時代的な変容過程の動向を明らかにしている。特に近世村落の階層組織や封建的土地保有・耕作関係、貢租、夫役などの精密な実態分析を、越前国全体を対象として総合的に行なった点は、従来この種研究がみられないだけに、極めて精彩を放つところである。また農村・農山村・農商工村・山村・漁村それぞれの特異性を検討し、さらに相互の比較考察をも行なうなど、巨視的な歴史的研究視角によって、現実の県下農山漁村が当面する実践的課題に直接ないし間接的に連らなる種々の問題意識を喚起させるうえで、甚だ貴重な著作と思考される。

その序文のなかで、学習院大学長児玉幸多氏が「宗門改帳を前後左右上下のあらゆる方面から十二分に活用して、人口や家族

構成だけにとどまらず、村落社会の全分野にわたって、克明に論じ出されている。」と、佐久教授の精力的な業績に対して深い敬意を表しているが、たしかにこのようなぼう大な史料を駆使したユニークな学究的著作は全国的にも他に例をみないものとして、極めて高く評価したいところである。

〔佐久高十著『近世農村の数的研究』（吉川弘文館刊、五八八ページ）定価九五〇〇円、県内主要書店で販売〕